

目の冒険

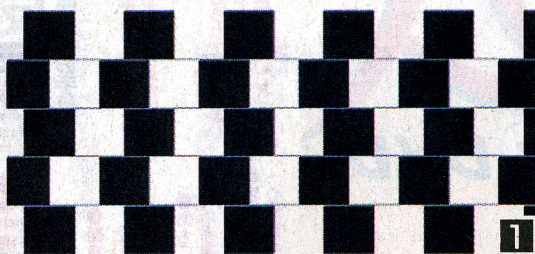
錯視の話 ①

北岡 明佳

大学で錯覚の研究をしていると、「化粧について教えて下さい」という質問が来る。そういえば、私のゼミの中でも、卒業論文のテーマに「化粧」を選ぶ学生が毎年1人はいる。

大学で普通に研究されている錯覚の話とお化粧の話は、ずいぶん遠いのであるが、要するにこういうことである。素顔が本物で、化粧をした顔は知覚をたますものである、つまり化粧は錯覚だ、という考え方だ。

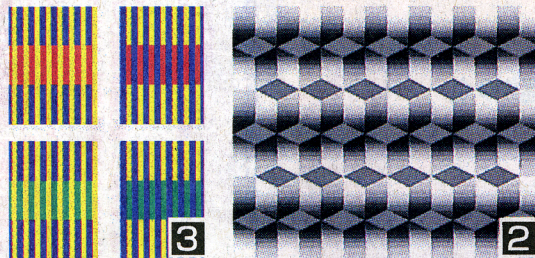
正方形がゆれている



見る動き、すなわち視覚における錯覚を、特に錯視という。目の錯覚と

呼んだ方が親しみがわくだろうか。

①は形の錯視で、灰色



の横線は本当は水平で平行なのだが、上から右・左・右・左に傾いて見える。②は明るさの錯視で、横に並んだ明るい菱形7個の列と暗い菱形6個の列が交互になっているように見えるが、実は

同じ灰色である。

③は色の錯視で、オレンジ色と赤紫色の縞模様があるように見えるが実は同じ赤色で、黄緑色と青緑色の縞模様があるように見えるのも、実は同じ緑色であるという錯視

である。

④は動きの錯視で、静止画なのに中の正方形領域が動いて見える。

あまり知られていないことではあるが、この10年ほどで錯視の研究は大いに進歩し、派手な錯視図形が増えてきている。順次紹介していきたい。



きたおか・あきよし
61年生まれ。立命館大助教授。著書に「トリックアイズ」「現代を読み解く心理学」など。専門は知覚心理学。

- ① カフェウォール錯視
- ② ログウイネンコ錯視
- ③ ムンカー錯視
- ④ 筆者作「保護色」